

## 第 69 回 大阪府青少年読書感想文コンクール・府 5

高校の部 特選

今を全力、輝く自分に

関西創価高 2 年・武田美紀子さん

「武田さん、授業頑張ってるな！」

「ありがとう。クラブがんばってるね！」

友だちと軽く挨拶（あいさつ）を交わして、私は受験クラスの七時間目の授業に向かう。

「しばらくサクスを吹いていないから、だいぶ腕が落ちただろうな。」そんなことを心でつぶやきながら、英語の教科書を開いた。

私は大好きな音楽から、ほんの少しだけ離れることにした。吹奏楽部を休部中。受験勉強に専念するためだ。大袈裟（おおげさ）かも知れないが、小学生から続けてきた吹奏楽の世界から離れることは、まるで親元を離れて旅に出るような気持ちだ。不安と寂しさを感じた。それぐらい私は音楽が大好きなことを改めて感じた。そして私にとっての音楽の意味を考え始めた。そんな時に出会ったのが、この本だった。

全日本音楽著作権連盟、略して「全著連」に勤める主人公の橘は、ある日、上司から潜入調査を命令される。期間は二年間。音楽教室における著作権の侵害の実態調査のためだ。橘にはチェロという楽器の経験があった。善良で人間味あふれる講師の先生や仲間たちとの交流の中で、幼少期の怖い体験がきっかけで失っていた人と音楽を愛する気持ちを取り戻していく。そして同時に、大切な仲間たちを裏切ることになるであろう潜入調査に一人心を痛め翻弄（ほんろう）されていくのである。

音楽の作り手の権利を守るとというのが全著連の考え。音楽教室のレッスンにまで著作権料を求めることは、音楽を楽しむ自由を侵害するというのが、音楽教室の運営団体ミカサの主張。それぞれ理にかなった主張である。しかしこの物語は、ミカサ優位の視点で展開される。それはなぜか。

私は同じ行為でも「何のために、何を守るために為（な）すものか」によってその価値が変わるという作者の思いであると考えた。潜入調査は、音楽の作り手の権利を守るとというのが大義名分である。ところがその内実は、社内派閥の権力争いであり、それがための成果争いであった。相対するミカサの運営する音楽教室の講師が、法廷で次のような証言をする。「講師と生徒の間には、信頼があり、絆があり、固定された関係がある。それらは決して代替えのきくものではないのです。」

人は「好きか嫌いか」で行動を起こすことがある。また「損か得か」が優先する時だってある。しかし人間が人間として輝くのは、いざという時に、人の生き方としての正しさを基準に行動できた時であると思う。

全著連が行った潜入調査は、個人の損得勘定によって始まった。詩人の谷川俊太郎さんが詩に綴（つづ）ったことが思い起こされる。「生きる」ということは「かくされた悪を注意深くこぼむこと」と。まさに全著連の行いのようなことを指すのではないかと思った。法的には全著連が優位である。しかし対するミカサの講師は「音楽活動を通して生まれる人間のつながりの価値を大切に考えてほしい」と訴えたのである。

私は改めて自分の所属している吹奏楽部のありがたさを感じた。部室に向かう友人の姿をうらやましく思いながら、自分は受験クラスの授業に向かう。そんな時、仲間や顧問の先生がかけてくれる「がんばってるな！」という温かな声にどれほど励まされ勇気をもっているか分からない。まさに信頼があり、絆

があり、固定された関係があり、決して代替えのきくものではないのである。ただ、音楽だけではない、そんな宝物に私は気づいた。

高校生活は、慌ただしく時間が過ぎていく。クラブも本当に限られた期間の活動だ。一日もあっという間。そしてきっと終わりを迎えるのもあっという間なのだろう。主人公の橘も、そんな限られた時間を生きていた。物語では、度々時計を見上げるシーンが登場する。潜入調査として過ごす時間はとてつもなく長く、人のつながりや音楽を楽しむ時間はきっとあっという間に過ぎたことだろう。

「始まってしまった音楽は、やがて必ず終わりを迎える。」このセリフが心にぐっとささった。私がこれまで参加してきたコンクールの場面が心によみがえる。開始前の心臓のドキドキ。演奏中のワクワク。そして演奏を終えて拍手に包まれる時に感じる達成感と少しの寂しさ。すべての始まりは、必ず終わりに向かう。積み上げてきた苦労が大きいほど終演は美しく輝く。人の一生も、きっとそのようなものではないだろうか。

人生は一度きりだ。昨日という日には戻れない。私が正面切って向かい合えるのは、常に「今」というこの瞬間だ。今への挑戦が未来を作り過去の苦労の意味を深める。だから私は、今の課題に全力を尽くし私らしく人生を輝かせていきたいと思う。

窓の向こうから吹奏楽部の練習の音が聞こえてくる。私はぐっとシャーペンをにぎって心に思う。

「みんな、がんばれ！ 私もがんばる！」（「ラブカは静かに弓を持つ」安壇美緒／集英社）